

アルヨことば その後

金水 敏

1

拙著『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店、二〇〇三年）では、「そうアルヨ、さっさと帰るヨロシ」のような、外国人（ことに中国人）が用いると考えられている、訛った話し方を アルヨことばと名付け、横浜居留地で行われていた、ピジン化された日本語を起源としているという見方を示した。本稿では、この アルヨことば なにしピジン日本語に関して、その後を知ったこと、人から教えていただいたことなどを書いておきたい。

2

拙著では、ピジン日本語の起源を示す資料として、一八七九年に刊行された *Exercises in the Yokohama Dialect*（以下、*Yokohama Dialect*）を紹介した。拙著を刊行した時点では、この資料についての先行研究を知らなかったのであるが、刊行後に、カイザー・シュテファン氏による詳細なご研究があることに気付いた。「*Yokohama Dialect*—日本語ベースのピジン」、『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』（同記念会編、一九九八年、汲古書院、八三—一〇六頁）である。当然知っていてよい文献で、見落としていたこと自体大変恥ずかしいことである。結果としてカイザー氏の重要なご論考を無視したことになる、申し訳ないことであった。

3

さて、同論文では、*Yokohama Dialect* の著者 (Bishop of HOMOCO という偽名が用いられている) が Hoffman Atkinson であること（注1）、「*dialect* というのは方言と言つより「野蛮で粗悪なことば」という意味で用いられていたこと」、Loreto Todd のピジンに関する規定に照らして、この本に収められた会話が安定したピジン (pidgin) の特徴を持つと言えること、等を説得的に論証している。また、語彙や発音についても詳しい分析を加えており、*Yokohama Dialect* の理解にとって第一に参照すべき論文であるとともに、ピジン研究の論文としても貴重であると言える。

さて、横浜ダイアレクトに代表されるようなピジン日本語と、現在中国人の役割語として認識されている アルヨことば との間には、若干の隔たりがある。*Yokohama Dialect* には *Yokohama dialect* だけでなく *Nankinized-Nippon*（南京訛り日本語）というものも収録されており、前者が主に西洋人が用いるものである一方で、後者は中国人が用いるものであるかのように書かれている。それぞれの例は次のようである。

横浜ダイアレクト

Is He ill? (彼は具合が悪いのですか?)

Am buy worry arimas? (アンバイ 悪い アリマス?)

(*Yokohama Dialect* 一〇頁)

南京訛り日本語

I should like to borrow 500 Yen from you if you have them. (もしお持ちなら、五百円貸していただきたい)

Anatta go-hakku iio aloo nallaba watark-koo lack' shee
high chacko dekeloo alloo ka

(アナタ ゴハクリヨー アルナラバ ワタクラシ(=私) ハイシャク デキル アルカ) (同三三頁)

一般に、明治時代の資料に見られるこの手のピジン日本語の話し手は、概ね西洋人である。それが、いつごろ中国人に限定されるようになったか、という点が、役割語の形成史としては大きな問題となる。まず、西洋人系の資料についていくつか挙げておく。

拙著では、岡島昭浩氏にご教示をいただいた、森銑三氏著『明治東京逸聞史』からの例(一八八一 明治二四年「新橋芸妓評判記」)を挙げたが、岡島氏からは、さらに次のような明治時代の小説の用例も教えていただいた。まず、アフリカ人の例である。

アフリカ人のダインスなりけり(中略)旦那私し貴郎叱りま
すない私し話し致します旦那叱るありますか私し泉さん助け
て貰ひました(中略)お嬢さま願ひます私し悪い事するない
お詫私し願ひます旦那どうぞ私し悪いない一日でも半日でも
一遍私しお邸帰るあります……

(須藤南翠『新粧之佳人』第五回(末尾) 一八八七 明治二
〇年)

次はアメリカ人の例である。

「私、良君が、日本へ行つたら日本語ばかり使ふよろしいと
仰やりましたから、それで可成左様してゐますが、外の日本
人、解るまいか思ひましてね……」

(中村春雨(吉蔵)『無花果』一九〇一 明治三四年、三六
三頁)

「私一人で遣るあります」(同、日本人牧師と結婚して日本に
来る米国女性、三六四頁)

次に、時代は前後するが、彰義隊生き残りの寺沢正明による『一生
一話』に、次のような例がある。一八六八(慶應四)年、上野戦争に敗
れ、敗走する榎本艦隊・開陽艦に乗り込んだフランス士官のブリユー
ネとカズヌーフが、日本人にこう語ったというのである。

アナタ上野デ負ケマシタガ弱クアリマセン。コレカラ私ト蝦
夷イキマス。蔽ノ根タベマス。開陽タクサン能キ船アリマス。
負ケマセン。来年三月帰リマス。其ノ時アナタ上野花見マス。
楽シミマスカ、酒ノミマスカ、喜ビマスカ。私思ヒマセン。
アナタ涙出マスアル

『一生一話』は山崎有信『彰義隊戦史』(隆文館、一九一〇。一九八
五年に鳳文館より復刊)に所収のもので、野口武彦氏にご教示いた
いた。野口氏著『幕末気分』(講談社、二〇〇二)二八三頁も参照され
たい(用例の表記も『幕末気分』によった)。この談話は、後年の記
憶によるもので、ステレオタイプ的に改編されている可能性はあるが、
創作ではなく直接体験者による歴史的記述であり、話者が特定されて
いるという点では、貴重な記録と言える。

4

このピジンの日本語が、専ら中国人訛りとして認識されるように
なったのがいつ頃からか、未だ明確にはなしていない。拙著では、一

九二二（大正一一）頃の宝塚歌劇「邯鄲」（宝塚歌劇団）（注2）の例、一九三二（昭和七）年および一九三八（昭和一二）年の「のらくろ」の例を挙げている。最後の「のらくろ」の例では、のらくろが属する猛犬軍と戦う豚軍が アルヨことば を用いている。そしてこの豚軍には、中国人が重ね合わせられているのであろうと述べ、しかしその根拠を示すことができなかったが、吉村和真氏「……」（……）によつてこの推測が裏付けられた。すなわち、明治時代の漫画において、最初中国は竜を以て象徴されていたのであるが、日清戦争以後、豚によつて表されることが多くなつたのである。すなわち当時日本人は、豚を見れば直ちに中国人を連想したと考えて間違いない。

最後に、最近気付いた例として、一九三八（昭和一二）年にキングレコードから発売された「チンライぶし」を挙げておく（一番のみ）。

手品やるアル 皆来るヨロシ

うまくゆこなら 可愛^{かわい}がつておくれ

娘なかなか きれいきれいアルヨ

チンライチンライ チンライチンライ

チンライライ

（「チンライぶし」樋口静雄歌、時雨音羽作詞、田村しげる作曲）注3

チンライとは「請来」で、「来てください」という意味の北京語である。この歌は中国に出生した日本人の間で大変はやったそうである。コミカルな曲調で、当時の日本人の、中国人に対するイメージの一端がよく分かる。

5

以上、とりとめなくピジン日本語および アルヨことば について書いてきたが、なお調査を続け、資料の穴を埋めていきたいと考えている。小説、映画、レコード等なんでも結構ですので、もしご存知よりの資料がありましたら、どうぞお教え下さい（kinsui@let.osaka-u.ac.jp）。特に第二次対戦以前のものがありがたいです。

注

1 なお、Yokohama Dialect の著者については今野真二氏からもご教示をいただいた。

2 渡辺裕氏著「宝塚歌劇の変容と日本近代」（新書館、一九九九）によれば、「邯鄲」は久松一聲作・原田潤作・編曲で一九二二（大正一〇）年に宝塚で初演、翌一九二三年には東京公演されている。また、一九三〇（昭和五）年に再演されている。

3 『20世紀につばんの歌 想い出の戦前・戦中歌謡大全集 解説書』（株式会社コロムビアファミリークラブ、一九九八）による。

【付記】

本稿は、金水（二〇〇四）「研究手帳 アルヨことば その後」（『いずみミニ通信』No. 3、五六頁、和泉書院）の原稿である。ただし『いずみミニ通信』には紙幅の都合で大幅に短縮した版が掲載された。この原稿は、短縮する前の版である。